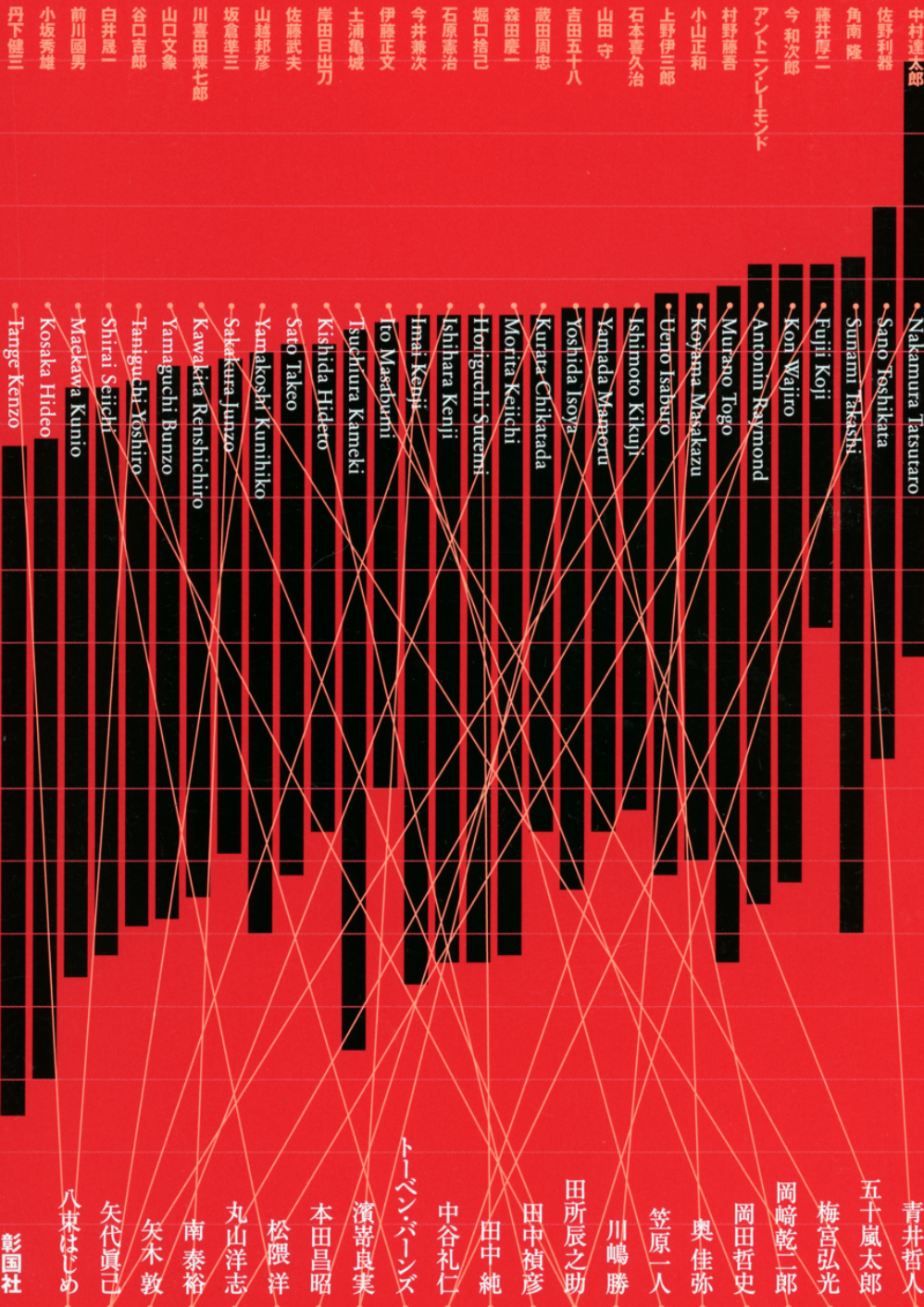


モダニスト再考 [日本編]

建築の20世紀は
ここから始まった

Modernist Reconsidered | Japan

1840 1850 1860 1870 1880 1890 1900 1910 1920 1930 1940 1950 1960 1970 1980 1990 2000 2010 彰国社編



モダニスト再考 **日本編**

建築の20世紀はここから始まった

彰国社編

彰国社

1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |

はじめに

『モダニスト再考「海外編」』の姉妹編となるこの「日本編」では、ヨーロッパで興ったモダニズム運動とその成果をいち早く移入して、日本独自のモダニズムを開花させ、さらには、深化・発展させるうえで大きな役割を果たした30人をクローズアップして紹介します。

吉田五十八、堀口捨己、坂倉準三、丹下健三をはじめ、日本のモダニズム史においては必ずその業績が紹介される建築家たちに加え、通信省や内務省などに籍を置いて腕を振るった組織内建築家、さらには、研究者や雑誌メディアで活躍した編集者も取り上げて、幅広い視点で読み直します。

彼らを中心として大正から昭和にかけて独自の発展を遂げた日本モダニズムは今に至るまで建築のあり方を大きく規定することになります。しかし、建築家、建築史家から美術家まで、21人の多彩な論者による読み直しの作業は、新たな光で日本のモダニズムを照らし出すこととまらず、われわれの建築を逆照射することになるでしょう。

まずは自らの脚元をしっかりと見つめ直すこと——この作業は、われわれの未来に対しても、これまでとは異なる新たな視線を投げかけることになるに違いありません。

彰国社

002	はつぐじ		
008	中村達太郎 Nakamura Tatsutarō	「亀裂の保存」	中谷礼仁
024	佐野利器 Sano Toshikata	「都市・テクノロジー・ナショナルイズム」	田所辰之助
036	角南隆 Sumami Takashi	「技術官僚の神域：機能主義・地域主義と〈国魂神〉」	青井哲人
056	藤井厚二 Fujii Koji	「藤井厚二という不安」	丸山洋志
068	今和次郎 Kon Wajirō	「ノート」『日本の民家』を中心として	中谷礼仁
082	アントン・レーモンド Antonin Raymond	「表現と表出と表象」	南泰裕
096	村野藤吾 Murano Togo	「『社会的芸術』として構想されたもうひとつのモニュメンタリティーの射程」	矢代真己
108	小山正和 Koyama Masakazu	「日本のモダニズムの雑誌編集人」	川嶋勝
116	上野伊三郎 Ueno Isaburo	「さまざまある建築工芸」	奥佳弥
134	石本喜久治 Ishimoto Kikujirō	「『建築美』、その転換という作為」	本田昌昭
152	山田守 Yamada Mamoru	「形態の誘惑——あるいは禁欲的エロティシズム」	濱善良実
164	吉田五十八 Yoshida Igoya	「本音と建前」	岡崎乾二郎
186	蔵田周忠 Kurata Chikarada	「日本モダニズムの「水先案内人」」	矢木敦
200	森田慶一 Morioka Keiichi	「IMITATIO CORBUSIERI——分離派から古典主義へ」	青井哲人
212	堀口捨己 Horikuchi Suremi	「『どうしようもないもの』の形容矛盾」	田中純
226	石原憲治 Ishihara Kenji	「全体性を回復する回路をつなぐ「社会技術」という視座」	矢代真己
234	今井兼次 Imai Kenji	「ドキュメンタリーのモダニズム」	濱善良実
240	伊藤正文 Ito Masabumi	「反転する純粹技術」	笠原一人
258	土浦亀城 Tsuchihara Kameki	「迷いなく駆け抜けること」	岡田哲史
272	岸田日出刀 Kishida Hideo	「丹下健三を世に送り出した男」	五十嵐太郎
278	佐藤武夫 Sato Takeo	「建築の政治性と記念性 戦中期日本のモダン建築」	田中禎彦
290	山越邦彦 Yamakoshi Kunihiko	「建築↓ルート・マイナス↑建築↓構築」という冒険	矢代真己
308	坂倉準三 Sakakura Junzo	「他者による建築はどこまで他者的であり得るか」	南泰裕
316	川喜田煉七郎 Kawakita Renshichirō	「ユートピア——アヴァンギャルドの往還」	梅宮弘光
334	山口文象 Yamaguchi Bunzo	「『実践』へ——文ちゃんの「ドイツ日記」を読む」	田所辰之助
346	谷口吉郎 Taniguchi Yoshirō	「転向の射程」	八束はじめ
364	白井晟一 Shirai Seichi	「伝統のパラドックスコスモポリタニズム、そして認知可能な文化的独自性への夢想」	トーマス・バーンズ
382	前川國男 Maekawa Kunio	「木村産業研究所という出発点」	松隈洋
394	小坂秀雄 Kosaka Hideo	「モダニズムにおける「体系」の刻印」	田所辰之助
402	丹下健三 Tange Kenzo	「神話的「日本」と「計画の王国」」	八束はじめ
420	執筆者プロフィール		
422	図版出典・写真撮影		

Nakamura Tatsuraro

1860-1942

中村達太郎

1882年、工部大学校造家学科を卒業後、工部省官繕局へ入局し、1887年まで皇居造営に携わる。東京帝国大学工科大学助教を経て、1894年、教授。建築学会の会誌『建築雑誌』の編集を手がけ、1906年、1人で蒐集、編纂した『日本建築辞彙』を出版。

亀裂の保存

中谷礼仁

むしろモダニストによる絵画の仕事は、いま現在、その因習だけが、彼の作品のアイデンティティを絵画として確立しうるようなそういった諸因習を発見することなのである。

マイケル・フリード「芸術と客性」^{〔1〕}

とりあえず、モダニズムという態度の規定を、ここからはじめたい。なんとなく承認されている近代「モダンの時代」においてモダニズムを再読すること、さほど意味が認められないからである。その

ような行為は、特に日本近代を対象とする場合、よくてそのお家芸の「洗練」に加担して終わる。

そもそも「切断」(モダニズム)を成立させるそれより前の基体が存在している。日本の近代建築を成立させているそれについての注釈からぜひともはじめるべきだと思う。

彼は不統一を編纂の主眼に置いた

いばら(茨)

曲線相會シテ生ジタル角点ライフ。加州^{〔2〕}辺ニテハ之ヲ「いが」ト称ス。(英0050)。図ノ一ハ唐破風^{からはぶ}ノ茨ニシテ、二ハ窓ノかすぶナリ。孰レ

モ尖端ヲ有スルヲ見ルベシ。蓋^{たて}かすぶノ語源ハ尖端^{ポイント}ノ意義ヲ有スル羅典語ニシテ、いばらニモ其意義アリ。地方ニヨリ毛毯^{イガ}ト称スルモ亦^{また}同一義ヨリ出タル語ナリ。然ルニ星霜ヲ経ルニ從ヒ、漸々原意ヲ

逸スル者少ナカラス。茨モ亦其例ニ洩レス。即チ図ノ三及ヒ四ノ如シ。三八徳川時代ノ唐破風ニ見ルコトアル茨ニシテ、四八十五世紀ノ某窓ニ

設ケタルかすぶナリ。何レモ尖端ヲ有セス、全ク原義ヲ失イタル形ナルヲ見ルベシ。

いまあたうかぎり、その表記を再現してみた「図一」(出典:『日本建築辞彙』括弧付のルビ、また句読点は引用者による、以下同じ)。その辞書は、いろは順なので「いばら」からはじまる。中村達太郎1人によつて蒐集、編纂された『日本建築辞彙』^{〔3〕}(以下、辞彙とする)は、いわゆる「日本建築」だけについての辞書ではなかった。伝統的な日本建築から、当時の西洋式建築の部位までの4000語

弱の建築関連用語を並べている。その意味での日本建築の辞彙である。

中村は、明治15年工部大学校を卒業し同20年まで皇居造営に携わつた後は、帝国大学工科大学教授として、以来専任の教育・研究者となった。たとえば辰野金吾が建築意匠を、伊東忠太が建築史を専門的に担当したのに比較して、中村はその他の領域をオールマイティにこなした。中村は、現在ではまったく忘れられた存在といつてよいが、今という建築環境学や材料学、構法、施工、建築法規など多様なジャンルの事実上の創始と見なす評価もある。また明治期のほとんどを通じて『建築雑誌』の編集委員をも任じていた^{〔4〕}。中村は、自らの行為をひとつの専門領域として閉じることがなかった。むしろ建築の外延において、ジャンルとしていまだ自律していない領域を探しだし、それにいくばくかの学的な整理を加えた。この非理念的な性格が、彼の特徴といえど特徴である。彼の著した技術書は実に多岐にわたるが、それらの中でも辞彙はもともと興味深く、豊かな情報に満ちている。



図1:『日本建築辞彙』
「いばら」の項より

辞彙は、1906(明治39)年に初版が出され、いくたびもの改訂を経て、中村の死後も戦後まで版を重ねた。絶版後は、特に「日本建築」に関係する実務者、研究者の間では、何世代にもわたって複写され続けてきた。私のものは、もう、だいぶかすんでしまっている。日本初の本格的な建築辞書であり、またこの100年に国内で発行された類書のうちで、これだけの命脈を保つてきたものも他にないだろう。現在流通している建築辞書

の、少なくともその「日本建築」に関する項目を照らし合わせることも無意味に近い。なぜならほとんどの部分がこの辞彙を引き写しているからである。

このように優れた辞書であるにもかかわらず、中村はその序の中で、奇妙にも、こう書いている。

説明の繁簡区々にして、「見統」を欠き居る如くに見ゆるならんが、其不統一なることがすなわち余の注意したることである。

つまり不統一にすることが、彼の「こ」での主要な課題であった。その表記は、確かに、「いばら」の項に象徴されるように、錯綜して

いる。西欧の類義語が引き当てられ、それらの意味の変容も併せて指摘される。いばらは、むしろ確定されていないことによつて「いばら」なのだ、とでもいいたげである。

なぜ不統一な建築辞書が、かような命脈を保つたのだろうか。むしろ中村のいう不統一にこそ、その鍵があるのではないか。いくつかのプロセスを経たうえで、私たちは再びこの辞書に立ち戻ってみたい。

モダンとモダニズムとはわけて考えたほうがいい

近代世界(モダン)にはさまざまな規定がある。ここではごく一般的なものを図式として、2つの解釈を採用してみたい。ひとつは「ウォーラーステインのいう近代世界システム(Modern World System)」と、もうひとつはB・アンダーソンによる国語による認識空間の公定(National Printed Language)を主軸とした近代・国民国家論

である。

前者は、単一の分業によつて覆われる広大な領域で、その内部に複数の文化体を包含する世界システムとしての近代像である。近代世界は「国家」を単位として動くのではなく、国家間におけるひとつのまとまったシステム(構造体)をなしている、とする説である。15―16世紀における西欧の世界帝国から資本主義化を第一波とし、19世紀において世界の大半が組み込まれたという。

そして後者における、18世紀後半から成立しはじめた国民国家とは、同じ「時間」「空間」を共有する「我々」(国民がいると感じること)によつて成立する。この共有された空間の下部構造に、国民的出版語がある。つまり時の権力によつて公定された言語の専一によつてこそ、国家を成立させる空間は生まれた。たとえば新聞をにぎわす、さまざまな事件に象徴されるように、互いになん脈絡もないはずなのに、そこになんらかの共時性が感じられてしまうこと自体が、すでに特定の空間をつくりあげている。